

武蔵野幕屋創立49周年記念祭

遺れる者

――イザヤ書第46章3～11節――

1989年9月24日

小池辰雄

旧約聖書で一番偉大な書はイザヤ書 兄の死と母の失明が私をキリストに導いた 回身・回帰
『聖書は大ドラマである』を毎日読んで力を得る 遺れる者には神を証しする責任がある 遺
れる者帰り来たらん 日本は滅びに向かっている キリストの中に遺れる者 キリストさえあ
れば何がどうなってもいい

【イザヤ7】

3 その時エホバ、イザヤに言いたまいけるは今なんじと汝の子シエアルヤ
シュブと共にいでて布をさらす野の大路のかたわらなる上池の樋口にゆきて
アハズを迎え。

【イザヤ46】

3 ヤコブの家よイスラエルの家の遺れるものよ、腹をいでしより我におわ
れ胎をいでしより我にもたげられしものよ、皆われにきくべし。4 なんじら
の年老るまで我はかわらず、白髪となるまで我なんじらを負ん。我つくりた
れば擡ぐべし、我また負いかつ救わん。5 なんじら我をたれに比べたれにた
ぐい、たれになずらえかつ相くらぶべきか。

【ゼカリヤ8】

5 またその邑のちまたには男の子女の子満ちて、ちまたに遊び戯れん。
6 万軍のエホバかく言いたもう、この事その日にはこの民の遺れる者の目
に奇しというとも我が目に何の奇しきこと有らんや。万軍のエホバこれを言
う。7 万軍のエホバかく言いたもう。視よ我わが民を日の出る国より日の入
る国より救い出だし、8 かれらを携え来たりてエルサレムの中に住ましめん。
彼らは我が民となり、我は彼らの神となりて共に誠実と義に居らん。

【ゼカリヤ9】

9 シオンの女よ大いに喜べ、エルサレムの女よ呼ばわれ視よ汝の王汝に来
る彼は義にして救いを賜り柔和にして驢馬に乗る。即ち牝驢馬の子なる駒に
乗るなり。10 我エフライムより車を絶ちエルサレムより馬を絶たん。戦争弓
も絶たるべし。彼国々の民に平和を諭さん。その政治は海より海に及び、河



より地の極^{はて}におよぶべし。

【ヘブル12】

26その時、その声、地を震^{ふる}えり、されど今は誓いて言いたもう『我なお一たび地のみならず、天をも震わん』と。27此の『なお一度』とは、震われぬ物の存^{のこ}らんために、震わるる物すなわち造られたる物の取り除かることを表すなり。28この故に我らは震われぬ国を受けたれば、感謝^{うやうやしき}して恭敬^{おそれ}と畏懼^{おそれ}とをもて御意^{みこころ}にかなう奉仕^{つとめ}を神になすべし。29我らの神は焼き尽くす火なればなり。

●旧約聖書で一番偉大な書はイザヤ書

お早うございます。今日は武蔵野幕屋創立49周年記念祭ということですが、本当は9月の22日です。最初に集会をしたのが9月22日で、御存知の通り、私の兄が北京で仆れた日です。今日の主題は「遺^{のこ}れる者」
という。「シャール」というんですが、「遺れる者」というのは、特に預言者イザヤの大事な啓示の言葉なんです。そこでイザヤ書の46章をさつき読んでいたわけなんです。

旧約聖書は39巻、新約は27巻。聖書は全体で66巻です。これは、「3×9＝27」と覚えればなんでもない。旧約聖書はヘブライ語で、新約はギリシャ語で書かれている。旧約聖書はユダヤ人の經典です。ユダヤ人は「旧約」と言わない。「律法、預言者及び諸書」という言い方をする。我々クリスチャンは「旧約聖書」、旧き約束と言います。新約聖書は新しき約束。もちろん、約束はキリストに関する事です。この旧約聖書39巻の中で一番偉大な書は、このイザヤ書です。預言者イザヤの言葉。39章までが第一イザヤ書。40章から55章までが第二イザヤ。56章から66章が第三イザヤ。

第一イザヤ書というのは、イスラエルは北イスラエルと南ユダと二つの国に分かれていましたから、先に北イスラエルがアッシリアに滅ぼされた。後から、百二、三十年後、南ユダの国が滅ぼされた。このユダの国の滅ぼされる少し前に出た預言者が、第一イザヤですね。これは、神さまのことを特に「聖者」（カードーシユ）という。この聖者に対する信仰、「信」、その点を非常に強調した預言者です。

第二イザヤは、バビロニアに捕囚されてから。北イスラエルはアッシリアに連れて行かれ、南のユダの国の主な人達はバビロニアに連れていかれる。バビロニアで70年間、捕囚の生活。ペルシアがバビロニアをやつつける。ペルシア王クロスがユダヤの民をエルサレムに還してくれる。神殿はもちろんぶつ壊されてしまっている。そこで新しく神殿が、第二神殿が建つんですね。この帰還するときに出た無名の預言者、それを第二イザヤという。イザヤ書40章から55章まで。これは旧約聖書が一番深刻な所です。



「国破れて山河あり」

というけれども、

「国亡びてなお經典あり」

と。最大の預言者です。無名の預言者。これは、神の愛を、深刻な「愛」を説いた。

第三イザヤは、神殿ができてから後の、いわゆるユダヤ教ですね、その最初の頃の預言者が第三イザヤ。多分、これはみんな、第一イザヤと霊的な霊統をふんでいる。全66巻が貫いている。これは、特に「希望」を、終末的な希望のことを書いた。

だから、キリストの弟子のパウロが、「信、望、愛」と言ったでしょ。それはもう既に、イザヤ書でもって、「信、愛、望」という、そういう特色を持っている。あんまり、こういう事を言わない。これは非常に大事ですが。特に、今日は、イザヤ書46章を、この真ん中の「愛」に関わることを主題としてお話しするわけです。

●兄の死と母の失明が私をキリストに導いた

私も、20歳の時から今日の85歳まで、65年間、聖書で貫いて来ましたから。私の今日ある第一の恩人は小池政美、北京の公使館員をしていた時に、東京大学から卒業して一年目です。本当は、英語がもの凄くできたから、ロンドンに行くはずだった。それが、上役の人が他の人と切り替えた。内定していたのに切り替えた。兄は北京に行つて腸チフスに罹つて一年もたたずに仆れた。27歳に未だ満たないです。その病床、電報が来ましたから、母が次兄と、私の二番目の兄と出掛けて行つた。非常に悪性のチフスだもんですから。同仁病院という病院です。仆れる少し前、二、三日前に、キリストが現れた。白衣のキリストが現れた。

「キリストさまがお迎えにいらつしゃつたので、お母さん、お先に失礼いたします」
と。それで、天界に往つちやつたです。

私は5歳の時に父を亡くしました。母にもっぱら育てられた。母はお茶の水の女学校の先生をしてね。子供は6人いたんだけど、私のすぐ上の兄貴はすぐ仆れちゃつた。五人の兄弟を本当によく育ててくれました。母の忘れることのできない言葉は、

「精神一到何事か成らざらん」

という言葉。今の若い奥さん達はこんなことを教えますか。魂を貫けば何事でもできると。そういう教育を私は母から受けました。「行つて参ります」「ただいま帰りました」「お早うございます」「お休みなさい」と、はつきり言いました。今のこの頃の子供たちは何だと、私は言いたくなる。親を親とも思わない。先生を先生とも思わない。

日本は精神的に滅びに向かっている。民主主義という社会的な公約の事態と、それから、家庭に於けるところの秩序というものがある。何も矛盾しないんです。そういう事に対する、本当の哲学的な頭がないんで困るよ。お母さんの言う事は、何でも「はいっ」と従つてやつ



てきました。小学校の先生もそうです。素晴らしい校長さんだった。第九巻『感想と紀行』（1987年刊）の中にも小学校の校長さんの事が書いてある。私は本当に感激して聞いていた。日共組なんて、あんな騒ぎをやっていて、何が教育かというんだ。

この兄の死が私にとつては本当の伝道であつた。そして、母の失明。私の母は、帰りに過労と心痛のため黄海の上で船の中で失明しちゃったです、緑内障で。兄の遺骨をかかえて失明している母を、私は忘れる事ができません。この兄の死と母の失明、これが私をキリストに導いた。先程の歌った歌（召団讃歌CI「東京召団讃歌」）にある通りです。だから、私の生涯はこの弔い合戦、そのものです。

人はそれぞれ、あなた方一人ひとりみなそれぞれの特長な路を歩かせられる。「路」、「各々の足で歩く」を路という。漢字は素晴らしい。誰でも人真似じゃない。その人でなければならぬ路を歩かせられている。それが、天の大道に即するかということ。大道に即する歩き方をすれば、本当の路を歩いていることになる。それが本当の「道路」という。「道路」というのは素晴らしい言葉なんだ、本当は。天と地に関する言葉です。

しかし、私の今までの歩みが、本当にそういうような歩き方をしていたか、というと、それは言えません。惨憺たるものです。躓いたり転んだり滑ったり。それでも、必ず立ち上がって進んで行った。絶対に横には行かん。

●回身・回帰

先程歌った讃美歌に、

「人は棄つれど君は棄てず」

という言葉がある。いろんな先輩に、或る先生方にも、友人、後輩、お弟子さんに、いろいろ私は棄てられました。いいです。キリストは絶対に棄て給わない。私はキリストの愛に圧倒されて生きています。しょうがないです。本当に圧倒されて生きています。だから、生命があるんです。

「キリスト教」じゃないですよ。キリスト自身です。それが、私の中に聖霊として入ってくださったのが、1950年11月の3日から5日にかけての阿蘇の祈りにおいて。天界からもの凄い光が来て、私はぶっ倒された。最初に、坐っていた身体がグッと空中にもち上がった。全身がしびれた。

「あつ、これが聖霊のバプテスマだ」

と。パウロがダマスコ途上でキリストにひっくり返されたでしょ。あれは、私よりか勿論もっと凄い。三日三晩、ものが言えず、目が見えず、口もきけず。パウロは、キリストに反抗していた奴ですからね。キリストに反抗していた最たる人、反抗のチャンピオン、これが復活のキリストにひっくり返されて、それで、「参った!」と。

「わが目より鱗のいときまもの落ちたり」



と。パウロの「回心」というけれども、ただ「心」が廻るということではないですよ。「回身」、本当はからだが廻っちゃったんです、「身」、全存在が。だから、「悔改め」という言葉は、本当は「回帰」なんです。

「めぐり帰れ、神・キリストに帰れ」

と。これは預言者がしょっちゅう言っている。

「神に帰れ、帰れ」

と。立ち帰ることが本当の前進なんです。

それから私ははつきり変わった。次元が違った。歌に詠っている通り。なるほど今までの信仰は、自分で信仰と思っていたような信仰だ。そんなものは本当の信仰じゃなかった。「うそ」とは言わないけれども。

内村鑑三先生以下無教会が――内村先生や藤井先生や塚本先生が「観念信仰」とは言いません。それぞれ立派な信仰の方です。けれども――この聖霊の体験においてパウロの次元からはズレている。無教会はただ

「十字架、十字架」

と言って、聖霊のことは言わない。

私は聖霊を受けてからはつきり違うということが分かったから、無教会から出た。また無教会は私を出した。私は無教会のアウトサイダーになった。ところが、キリストの直弟子たちのインサイダーになった。もう私は嬉しくてね。人に何と言われようと、どう評価されようと、一向差支えない。

ある牧師さんたち、25、26人、

「小池先生のお話を聞きたい」

と言うから、語ってあげた。その中の5、6人が、

「今日は本当に分かりました」

と、手の痛いほど握手された。今まではいわゆる聖書の研究であった。「研究」で聖書の世界に入れるかというんだ。「聖書研究会」はたくさんあるね、悪くはないよ。悪くはないけれども、それはただ古典として勉強しているだけのなしだ。

日蓮はさすがに偉かったですね。

「法華経は頭で読む奴はたくさんある。心で読むやつは少ないが、お前は身体からだで読め」

と言った。佐渡へ流されるちよつと前に、相手は日魯という弟子だろうね。日蓮は法華経をからだで読んでいました。全存在で。だから、「南無妙法蓮華経」と彼が唱えれば、龍の口で斬ろうしていた奴がぶっ倒れる。本当にそうです。私は、歴史的にどうだったかなどと言わなくても、はつきり分かるんです。硬直しちゃうんですよ、霊に撃たれて。それだけの坊さんです。一流の坊さんはそうでしょ。最澄、空海、法然、親鸞、日蓮、道元、白隠、こういう連中はみんな仏教の世界で超一流だ。あの人たちのものを読むと楽しいよ、私は。



次元的に似ているからね。

ただ、はつきり言つて、お釈迦さんは悟つた世界です。けれども、キリストは初めから神の世界に生きていた人です。12歳のキリストに坊さんたちがかなわなんだ。もう、けたが違うです、キリストという方ははつきり。キリストの生命に來たら、他に何も要らんですよ。次の世界に何を持って行くんですか。裸一貫でしょ、みんな。その時に、魂の中にキリストの霊が無かったら、どうするんですか。仏教の世界でもいいですよ。本当の如來の現身みたいに成つてください。

日本の教育がダメなのは、教育家たちが本当に魂でそういう世界に入っていないから。制度でも何でも無い。生徒が悪いんじゃない。先生方がその世界を持っていないから。

●『聖書は大ドラマである』を毎日読んで力を得る

この兄とこの母が私の原動力になった。生命への道しるべです。だから、私は生涯を福音の証に献げなかつたらすまない。それが本当の兄に対する応えであり、母に対する応えである。正直、あなた方のような方が次から次へと

「これだ!」

と言つて、喜んでやつていらつしやる。私の話を聞いて、もう何百人アレしたか分からんですよ。ところが、本当に聖霊を受けないというと、何かゴタゴタしては出て行つたり、キリスト教を捨てたり。私は、人の信仰はどうでもいいから、「どうぞ、ご勝手に」というわけだ。牧師さんみたいに、後から行つて訪ねたりはしないんだ。「どうぞ、およろしいように」と。

それが大体の私の今までの輪郭です。それで、全聖書の講義も既に終わってしまった。それで第十巻を書いたわけです。第十巻『聖書は大ドラマである』(1988年刊)、この一巻は本当に毎日読んでください。私は毎日読んで、自分で力を得ているんだから。私は自分の頭で書いたんじゃないですよ、これは。示されて書いたんだから、みんな。本当かうそか、本当にやつてみてください。

「死んでも死なないような本当の生命が来ているか」

というんだ。いわゆるお説教じゃないですから。

それを日曜日は、「お客さんが來たから」だとか何とかといつて、この世の理由でもつて來ない。キリストがルカ伝の第14章でその譬えを言っている。

「招いたのがなんのかんのと言つて來ないが、天国の門はもう閉ぢちゃっているぞ。

嘆きはがみしても知らんぞ」

と。私は一回といえども日曜をいい加減に過ごした事はないです。今、一か月に三回ここで私がお話しますが、四回目は自分でもつてしっかり身体で読む、身読せよと。「休会」と書かない、「各自聖書身読」と書いた。聖書を読んでその文字の奥から響きが伝わってくる。



「ああもう、あり難くてしょうがない、力が来て」

と。だから、私は「圧倒されている」と言う。キリストに降参するまでは、その世界に入れない。

「キリストはこんな事をしたんだろうか、それは本当だろうか、うそだろうか？」

と、勝手に考えてください。そんなことをしているうちは、いつまでたっても始まらないから。

「参りました！」

と、降参すると、門が開かれてくる。これが聖書を読む、聖書の中に入るただ一つの門なんだ。ぶつ倒れなければ。

「叩けよ、さらば開かれる」

という。キリストという門は十字架だからね。十字架に体当たりしてぶつ倒れる。そうすると門が開かれる。その先は詩篇23篇みたいな素晴らしい所になる。緑の牧場、憩いの汀^{みぎわ}。どんな偉大な文学も芸術もみんな源泉は聖書なんです。他のいろんな要素もあるけれども、第一は聖書なんです、ヨーロッパのものは。東洋のものは仏教のいろんな経典があるでしょうけれども。

とにかく、この二大宗教です。宗教をいい加減にしていたら、魂はおかしくなる。魂は宗教界のものなんです、本来。政教分離なんていつてね、政治家が全然宗教の世界を知らないようなことではダメなんだ。もちろん、外側でいきなり宗教を持つてきて政治をするわけじゃないけれども。政治の根底に本当の宗教がなかったらダメなんだ。西郷南洲が、

「天を相手にせよ」

と言ったじゃないですか。グラッドストーン、リンカーン、ビスマルク、ああいう偉大な政治家はみんな聖書を本当によく読んだ人達です。どうして日本人はそういうことに醒めないかと思う。私は詩の上ではつきり書いてやるから。この詩〔遺稿詩集『霊界の星々』1998年刊〕を書くまでは死ぬわけにはいかん。

●遺れる者には神を証しする責任がある

それでは、イザヤ書46章をちよつと開きます。

3 ヤコブの家よイスラエルの家の遺れるものよ、腹をいでしより我におわれ胎をいでしより我にもたげられしものよ、皆われにきくべし。

素晴らしいね、第二イザヤに対する神さまの預言です。聖書は、ここはイスラエルやヤコブに言っているけれども、聖書はいつも自分自身に語りかけていることとして読まなければダメですよ。ただ歴史を学んでいるんじゃないですから。

「遺れるものよ」

といっているのは、散々アッシリアやバビロニアにやつつけられて多くの人が死にました。



この第二次大戦争で今遺れるものだ、我々は。たくさんの方が犠牲になったです、本当に。8月15日に祈るでしょ。惜しい人がたくさん死んでいる。惜しい青年も。遺れる者には責任がある。

「めでたし、めでたし」

なんていうもんじゃないんだ。

「自由、自由」なんて言うけれども、とんでもないよ、この頃の「自由」なんてものは。勝手な事ばかりやっている、今の自由は。自分さえ良ければ他はどうでもいいような顔している。若いのが「シルバーシート」に腰掛けて平気でいる。昔はシルバーシートなんか無かったですよ。だけでも我々は、お年寄りや女の方でお子さんなんか抱いていれば、すぐ自然に立ったもんです。そんなことはもう当たり前のことだった。その当たり前の方が成り立たないんだよ、今は。それで、シルバーシートなんか作らなければならない。情ない話なんだ、本当は。

本当の自由には必ず責任があるんです。「言論の自由」なんていつて、勝手な事を言っ人を傷つけていいものか。責任があるんですよ。責任を負うところの力は何処から来るか。これは天からくる、智慧も力も。

だから、「遺れる者」というのは本当にそうなんです。北イスラエルも南ユダも、国は破れた。アッシリアやバビロニアにやつつけられて、多くの人達が惨憺たる死に方をした。その惨憺たる死に方が「エレミヤ哀歌」に書いてある。あの戦争当時の東京を思い出す。それで、

「生き残った人たち、お前たちには責任があるぞ。神さまを証しする責任があるぞ」ということです。

4 なんじらの年老るまで我はかわらず、白髪となるまで我なんじらを負^{おわ}ん。
我つくりたれば擡^{もた}ぐべし、我また負いかつ救わん。

これ、全部、詩なんです。預言者の文字は全部、詩なんです。対句法になっている。私は大学で、ギリシャ語よりか先にヘブライ語を勉強した。預言者の生まの声を聞きたかったから。

5 なんじら我をたれに比べたれにたぐい、たれになずらえかつ相くらぶべきか。

「汝ら我を誰に比べるか。誰になずらえんか。そういうものが一体あるか。金や銀で偶像を造って拝んでいるが、そんなものは、呼んでもひとつも応えないし、彼らを助けはしない。私はそんな偶像ではないぞ」

と。偶像信仰が、本当の信仰を揺り動かしたりして、愚民は御利益的にそっちの方へ傾いたり。ところが、本当の意味の御利益はありはしない。御利益信仰じゃないですよ。神の意志を行ずる、これが「信」。「あなたの聖意が成るように」というのがキリストの祈りです。



「あなたの聖意が成るように、どうぞ私をお使ください」

と。「どうぞ私をお使ください」とは書いてない。けれども、キリストは、もちろん、全存在をそれで提身しているわけです。だから、

「十字架の死に到るまで従い給えり」

という。そして、甦ってきた。復活のキリスト。キリストは十字架で贖罪の死を遂げたら、その後はもう、甦らざるを得ないんです。

「復活はどうだこうだ」

なんて論ずる必要はない。天界から、今度は、聖霊として現れざるを得ない。みんな、この「ざるを得ない」世界、霊的必然の世界なんです。

預言者は、神さまの聖言を受けとつて、それでもつて、全存在でその力で生きていた。神・キリストの言は、これは霊言ですから、意味の言ではないですから、必ず力があるんです。

「ラザロよ、起きよ!」

たとえば、死人が甦ったじゃないですか。もう三日も経つて、そろそろ身体が腐るというようなのを、ところが、キリストはこれを甦らせちゃった。葬式の行列があつて、棺に手を当てて、横で泣いているお母さんに、

「大丈夫だよ」

と、棺の蓋を開けたら、これも甦ってきた。大変な人です、キリストという方は。あれはみんな本当ですよ。宗教物語じゃない。そのキリストに降参するまでは、そういう素晴らしいもの凄い世界に入れない。魂の世界はごまかしがきかないからね。はつきりしているから。

どうぞ、皆さんは、今日のこの一回を、本当にその意味で受けとつてもらいたい。だから、今日来ない方は、どうして来ないかと、私は言いたいんだ、本当は。何はさておき来なくちゃ。そういう気合がないから、私は嫌になっちゃうんだ。いい加減だったら、もうこの集会は解散しちゃう、いい加減にやつているなら。

「生命賭で来なさい。本当の生命を得るから」

と言うんだ。少しくらい病気で熱があつたつていいですよ。ここに来れば治っちゃうから。キリストを、一体、何だと思つていらっしゃるんですか。私は、キリストのただ媒介になつていただけのはなしです。

●遺れる者帰り来たらん

イザヤ書の7章3節に、

「³その時エホバ、イザヤに言いたまいけるは今なんじと汝の子シエアルヤシ
ユブと共にいでて布をさらす野の大路のかたわらなる上池の樋口にゆきてア
ハズを迎え。」(イザヤ7:3)



そこに「シエアルヤシュブ」という言葉があるでしょ。「シエアルヤシュブ」というのは、「遺れる者帰り来たらん」

という意味なんです。これは、自分の子供につけた名前です。

「遺れる者は帰ってゆけ、神さまのところへ帰ってゆくんぞ。生き残った連中は神さまに帰っていいよ神さまの力を証しろ」

と。それをお前の息子の名前にしろと、神さまに告げられたわけだ。それで「シエアルヤシュブ」という名前を息子につけた。ユダヤ人の名前はみんな、固有名詞でも、意味がある。「アブラハム」というのは、「アブ・ラハム」、「多くの人たちの父」という意味です。そういう不思議なことを既に第一イザヤが示されている。だから、イザヤ書は、全部、第一、第二、第三は貫いて、遺れる者の責任を特に、第二イザヤの小さなグループに、インナーグループには、よく彼は神の真理を伝えやった。「遺れる者」という。

キリストの遺れる者、使徒たちも遺れる者だ。ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロ。この四人。ペテロ、ヨハネ、ヤコブは、これはキリストに直かに地上でもって一緒に歩いていた連中だ。パウロは、キリストに逆らっていたんだからね。一緒に歩くどころのさわぎじゃない。それが、キリストが十字架に架かって天界にいつてから、復活のキリストがダマスコ途上でひっくり返した。クリスチャンを迫害して、とっつかまえて、牢屋に入れようとして、そういう悪いことをした。パウロというのは本当は殺人犯なんだ。最初の殉教者ステパノを石で撃つのを、パウロはよしとして見てた奴なんだ。ところが、

「彼らは為すことを知らない、許してやってください」

とステパノは言って、天界に行っちゃった。大変な人です。そのパウロが、キリストにひっくり返されて、完全に、

「参りました!」

と言って、弟子になった。今度は、弟子のうちの最も素晴らしい弟子になっちゃった。これくらい鮮やかな転回はない。しかし、今のユダヤ人は、このパウロを、ユダヤ教の奴らは、「このパウロは、あれは間違っていた」と、相変わらずそんなことを言っている。かたくなだね、ユダヤ人というのは。「うなじこわき民」と旧約聖書にも書いてある。

●日本は滅びに向かっている

十字架のキリストの両脇に盗賊が二人いた。片一方の傲慢な奴は、

「お前は神の子なら俺たちを救ったらいだろう」

なんてことを言った。もう片一方は、

「我々はさんざん悪い事をしたんで、せめても聖国にいらっしやる時に覚えてください」

と言って、心砕けた。キリストは、



「お前は今日私と一緒にパラダイスだ」

と言った。人類を二つに分けると、高慢な奴か、本当に心碎ける奴か、どっちかに分かれる。人種の差別じゃない。魂の差別です。神さまに降参するか、

「神なんかあるか」

なんて勝手なことを言っているか。そういうように分かれちゃう。20世紀は、非常にこっちの方になってあぶないね、こっちの盗賊がたくさん居る。日本の今のいろいろな現象を見てごらんさい。みんな狂っちゃっている。本当の嘆きを感じないんですか。日本は滅びに向かっている。あんまりもうしょうがないから、藤井先生が、

「日本よ、滅びよ！」

なんていう詩まで書いてやった。内村先生は、

「もつこんな国には愛想をつかしたと、そつ言ってくれ」

なんて言った。今からもう60年前の話ですよ、これ。来年はちょうど60年だ。60年前の日本に愛想をつかしたんだからね、内村先生は。今いたら、大変なことだ。

本当の政治家が一人もない。維新の西郷南洲、吉田松陰、佐久間象山、坂本龍馬、ああいふ魂がいなくなった。

それから、ゼカリヤ書第8章5節から、

「⁵またその邑^{まち}のちまたには男の子女の子満ちて、ちまたに遊び戯れん。

⁶万軍のエホバかく言いたもう、この事その日にはこの民の遺^{のこ}れる者の目に奇^{くす}しというとも我が目に何の奇しきこと有らんや。万軍のエホバこれを言う。⁷万軍のエホバかく言いたもう。視よ我わが民を日の出る国より日の入る国より救い出だし、⁸かれらを携え来たりてエルサレムの中に住ましめん。

彼らは我が民となり、我は彼らの神となりて共に誠^{まこと}実と義に居らん。」（ゼカリヤ8：5～8）

この「遺れる者」は本当にこの頃になったら、み霊でもって力を得て、寡婦や孤児や旅人をよく懇ろにとりあつたと、その前の方に書いてあります。それが、本当の「遺れる者」だと。

ついでに言っておきますが、ゼカリヤ書の第9章にはキリストの預言が出ています。

「⁹シオンの女^{むすめ}よ大いに喜べ、エルサレムの女よ呼ばわれ視よ汝の王汝に来る彼は義にして救いを賜り柔和にして驢^{ろば}馬に乗る。即ち牝驢馬の子^{こま}なる駒に乗るなり。

「女^{むすめ}よ」ということは「エルサレムの市民よ」ということです。「義」と「救」は同義語になっている。これは、キリストがエルサレムに入城した時に、この預言をそのまま彼はなさったわけです。

¹⁰我エフライムより車を絶ちエルサレムより馬を絶たん。戦争弓も絶ゆるべ



し。彼国々の民に平和を諭さん。その政治は海より海に及び、河より地の極におよぶべし。」（ゼカリヤ9：9～10）

「車」は戦車のこと、「馬」は軍馬のことです。その時の全世界、ユーフラテスの河から地中海までずつとわたって。

平和のもととは、申し上げているとおり、平安ですから。神さまとの関係が安らかに、縦の関係が立っていないければ、平和なんていったって平和は来っこないです。そんなものは偽りの平和だ。しょっちゅうやっているね、ソ連とアメリカは一生懸命で。何とか制限なんて言って。いくらそんなことしたって、本当の平和にはならない。片一方ではもの凄い兵器を造ってみたり。恐いのは弾じゃないんだ、人間の心だ。サタンの手下になっている心だ。だけれども、キリストは何ものよりも強いですよ。キリストにあつては絶対に勝つことができます。

●キリストの中に遺れる者

それで、あなた方は、とにかく、49年間、私は集会を貫いて来ましたが、勿論私の家内は初めからですが、本当に初めからの方は恐らく他にはいらっしやらないでしょう。途中で抜けたり、また帰ってきたり、いろいろだった。とにかく、皆さんは、今本当に遺れる者だと私は信じている。

「いえ、明日もうどつかへ行きますよ」

なんて、ああどうぞ行ってください。ひとつも止めませんから。

しかし、「遺れる者」というのは、神の、キリストの許に遺れる者で、武蔵野幕屋から出て行つたていいよ、本当にキリストの許に遺っているのなら。私は最後に独りになったっていいんだから。

とにかく、あなた方は、この地上に於て、あなた方の生涯、本当に遺れる者になっていただきたい。キリストの中に遺れる者に。いいですか。私はそのうちに向こう側にいつちやうからね。この集会はどうなるか知らんけれど。十二の召団の人たちは、人間的な繋がりがりじゃない。聖霊におけるところの繋がります。これは切ることができない。

「十字架・聖霊」

ということ。十字架・聖霊がはつきりしていれば、絶対にこれは崩れません。何年会わなくても、昨日会ったようなくあいに握手することができ。それだけの存在になつてくださいよ。それを「遺れる者」と言いたいんだ。それは、必ず天界へ行く。

このことは、

「震われざる者」

という別な言葉がある。ヘブル書の12章26節、

「²⁶その時、その声、地を震えり、されど今は誓いて言いたもう『我なお一た



び地のみならず、天をも震わん』と。27此の『なお一度』とは、震われぬ物の存^{のこ}らなために、震わるる物すなわち造られたる物の取り除かることを表すなり。28この故に我らは震われぬ国を受けたれば、感謝^{うやうやしさ}して恭敬^{おそれ}と畏懼^{おそれ}とをもて御意にかなう奉仕^{つとめ}を神になすべし。29我らの神は焼き尽す火なればなり。」（ヘブル12・26～29）

神さまの振るいかけられて、捨てられるようじゃダメだと。

「震われぬ物ののこらなためなり」

と。それは、いわゆる「自分の信仰」なんて言っただけでダメですよ、そんなものは。当てにならんから。

キリストの信をいただき、キリストの愛をいただき、キリストの力をいただき、キリストの光をいただく。これが、聖霊の世界だ。聖霊の内容は限りないんですからね。聖霊というのは冷たい霊じゃないですよ。

今日は秋だから、秋の象徴はコスモスなんだよな。「コスモス」は「宇宙」という。あれは本当に天的な世界だね。野原に咲いているその姿が一番いいんだよな。あなた方一人ひとりが、女の方だったら、それぞれが花になり、男だったらそれぞれの樹になって、神の栄光を現わすわけだ。

私はだいたい百くらい詩（召団讃歌）をつくった。とにかくもう、烈々たるものが私の中で動いています、火の如く。どんな嵐にも消えないです。こんな事をぶちまけて言う牧師さんが有るんですか、一体。「まだ、私の信仰は」なんて言っただけ、何を言っているか。自分の信仰なんか省みて何になるか。上から受けとっているだけの人はなしだと。

だから、

「無即無限無量」

です。小池という「一」を「ゼロ」で割ると「無限大」（ $1 \div 0 \parallel \infty$ ）になる。あなた方一人ひとりがそういう質の人間になつてもらいたい。これ（ $1 \div 0$ ）は十字架です。これ（ ∞ ）は聖霊の世界です。

●キリストさえあれば何がどうなってもいい

「遺れる者というのは自分たちのことだ。そこには責任と栄光がある。そして、その栄光はみなキリストの栄光だ」

と。「栄光在^ま主」と書いてあるでしょ、真ん中に赤で。私は、昨日の晩、これ（集会次第）を書いていて、楽しくてしょうがなかった。これを書いているうちに、どんどん浮かんでくるんだよな。

「もう、何がどうなってもいい、このキリストさえあれば」

と、そういう気持ちになりましたか。ゴタゴタ考えるんじゃないよ。どう扱われたって、



どう思われたっていいじゃないか、そんな事は。しっかりしろ。青年諸君は、それだけの気合のある青年になつてもらいたい。私は、言葉は烈しくても、本当にあなた方の魂を愛するから、火の如く言わざるを得ないんです。そうしたら、

「本当にそうだ」

と言つてくれなくては。

お医者さんや、お薬、それぞれの役割はあります。けれども、生命の生命はキリストです。キリストに本当に祈り込めば、「帰入」、帰り入る、「祈入」、祈り入る、全存在を。何かお願いするんじゃない。自分自身を投げ入れることなんです。

「我れキリストのうちに」(エン・クリスト)、

「キリストわがうちに」(エン・エモイ)

とパウロが言つた。これは、本当の現実をパウロは語っている。この信仰の現実は、「信じ仰ぐ」(信仰)んじゃないです。「信じ交わる」世界(信交)なんです。魂が交わっている世界です。これは一如の世界です。

「我が汝か、汝が我が」

という世界。その一如の世界に入らなければ。仏教でもそうなんです。空海の信仰なんか正にそうだね。「即身成仏」というやつだ。そうしたら、もう楽でしょうがない。私は、

「がんばれ!」

なんて言われたって、私はひとつもがんばりませんよ。楽でしょうがないから。楽で、力が来でしょうがない。

大芸術も、そこから力が来るんですよ。ベートーベンにしろ、レンブラントにしろ、超一流の人は。ゲートがそうだ、

「われ神のうちに生き、動き、また在るなり」

という、あの言葉が大好きなんだ、ゲートは。漱石さんは、素晴らしいけれども、もう一歩だったね。「則天去私」と言つたけれども、

「まだ自分は則天去私まで行つてない」

と彼は手紙の終わりの方で書いている。「天に即し己を去る」、素晴らしい言葉です。信仰の本当の現実、則天去私なんです。在れども無きが如し、無けれども在るが如し。

「鞍上人なく、鞍下馬なし」

という世界です。競馬の本当のチャンピオンはそうなる。馬も無ければ、騎士もない。その境地になつたら、これは大変なことだ。溢れてしょうがない。

あなた方は、そういう意味で、遺れる者で、貫いていただきたい。「がんばる」じゃないよ。貫かざるを得ない。遺らざるを得ない。ざるを得ない世界が本当の世界だから。

「こうしようか、ああしようか」

なんてのではダメなんだ。おしまい。祈ります。

